

# マロンくと空飛ぶ帽子\*

著: 葛

1.

散歩道を歩いていると、動物たちのうわさ話が聞こえてきました。

「こないだ俺がある夜、湖の近くを歩いていたら、どこからともなく、しくしく、と泣く声がしたんだ。

月明かりを頼りに泣き声の元を探したんだが、だんだん怖くなってきてさ、逃げちまったよ。」

「お前さんも臆病だね。そんな泣き声で逃げ出していたらこの先どうなるんだい。」

「ゆ、幽霊かもしれないじゃないかい。」

「お前さん、そんな幽霊ありゃしないんだよ。あたしたちに幽霊なんてものは見えないのさ。

見えるなら精霊か天使さんたちだろうに。」

うわさ話は、強風と共にすうっと消えてどこかへ吹き流されてしまいました。

そんなこともあるものなんだなあ。

マロンくんは風の便りのうわさ話を聞くのが楽しみでもありました。いろいろな動物たちの話が聴けるので、時には面白い発見もあるからです。今日のうわさ話はいつもよりミステリアスで胸をどきどきと高鳴るものでした。

2.

うわさ話に気をとられていたので、曲がるはずの道を曲がらずに、マロンくんはそのまま歩き続けました。しばらく歩き続けているうちにマロンくんはようやく道を間違えたことに気付きました。歩く足を止めて、周りを見渡します。空を見上げ太陽の位置や風の向きを確かめました。ずいぶん行き過ぎたようです。マロンくんは即座にひき返すことにしました。引き返す前に、道の先を見ると、遠くできらりと光るものがみえました。思わず興味を惹かれたマロンくんは、光るものの正体を確かめにいきました。正体は、やわらかい輝きを持った小さな帽子でした。マロンくんは帽子を手にとり、かぶりしました。

するとどうでしょう。帽子はぴったりでした。ぴったりのサイズに大喜びのマロンくんは、スキップしながら元来た道を歩きはじめました。歩き始めると、マロンくんの体がふわりと浮かびはじめました。どんとんと体は上へと上がっています。

これはすごいや!

マロンくんは、ますますわくわくしました。そして、空の雲へ向かいはじめました。

3.

降り立つと、泣いていたのは羽のない天使でした。

「天使さん、天使さん、どうしましたか。さあ、顔をあげてください。」

マロンくんは優しく声をかけました。天使は泣くのをやめずに、顔を上げません。

「私は、雲にすんでいる天使。こないだまでは天使でした。しかし今はもう天使ではありません。

地上に無断で降りたときに、私の大事な帽子をなくしてしまったのです。

帽子がないと私は雲へもどれません。どうしたらいいのか途方にくれているのです」

雲の天使は、涙を流しながら答えました。

「それはかわいそうに。ぼくも一緒にさがしましょう。」

それをきいた雲の天使は顔を上げました。

そして、マロンくんの顔を見て、あっといいました。

「あなたのかぶっている帽子はどこで見つけたのですか」

「これはぼくが道で拾ったものです。これをかぶると体が浮かび、そしてここまで飛んできました。

あなたを見つけたのもこの帽子のおかげなのです。」

雲の天使は、涙を流しながら言いました。

「小さなくまの方、どうぞわたしの話をきいてください。その帽子は私が落とした帽子ととても似ています。みせてもらえませんか」

マロンくんは快く帽子を雲の天使にわたしました。

4.

何かマロンくんの手にあたりました。思わず手を緩めてしまい、帽子を落としてしまいました。

あわてて拾い、顔を上げると、驚きました。雲の天使が二人目の前に立っていました。

どちらもそっくりさんです。マロンくんはきょとんとしました。

ひとりの雲の天使は手を差し伸べ、言いました。

「さあ、私にその帽子をください。」

もう一人の雲の天使は、差し出した手を押しのけて言いました。

「渡してはなりません」

「何を言う。お前は偽者。私が本物です!」

押しのけられた天使は怒りました。

「何を迷うのですか。ここで泣いていたのは、この私です。」

そこでもう一人の天使は言いました。

「くまの方、ここから立ち去り、雲の上天使に会ってください

!本物がどちらかわかる方法を教えてください」

その言葉を聞いて、マロンくんは帽子をかぶり直しました。そして、天へ向かいました。

「私が本物だ-!!」

声はだんだんと小さくなっていきました。

雲の中についたマロンくんは、上天使を探すことにしました。

飛び回ると、視界はもやがかかり、目の前をさえぎります。

雲をかき分けながら飛び回っているうちに、ひとりの天使に出会いました。

「すみません、天使さん。ぼくは上天使さんを探しています。どこにいけば会えますか。」

するとその天使は答えました。

「くまの子よ、私が上天使。おや、そなたは見たことにある帽子をかぶっているではないか。」

そこでマロンくんは説明しました。

「この帽子は道端で拾いました。帽子をかぶると、体が浮かび、空を飛び回りました。

すると、山のふもとで、雲の天使と名乗る方を見つけました。

帽子をなくしてしまい戻れないと嘆いていたのですが、

ぼくがみつけた帽子が探していた帽子でした。

すると、もうひとり似た雲の天使が現れました。

ふたりともこの帽子をなくしたといっているのですが、どちらに渡せばいいのかわからなくなってしまいました。」

上天使は微笑んで答えました。

「心やさしい、くまの子よ。これをもっていきなさい。」

渡されたのは、小さな鏡でした。

「これを二人の天使に向けると、光が放たれる。光が当たったほうが本物、当たらないほうが偽者。幸運を祈る」

「ありがとうございました。」

マロンくんはお礼をいい、地上へ戻りました。

5.

まだ二人の雲の天使は言い争っていました。

そしてマロンくんを見ると、ひとりの天使は詰め寄りました。

「さあ、はやく私によこしなさい。早く戻らないといけないのです。」

「ぼくは上天使さんに会い、これを預かりました。この鏡でどちらが本物か見分けられます。」

そしてマロンくんは、一歩さがり、そして、鏡を二匹に向けました。すると、どこからともなく黒い雲が現れ、冷たい風が吹き、そして、暗闇が辺りを覆います。暗闇の中、一筋のまばゆい光がさし、ひとりの天使に差し向けられました。光が当たらなかった雲の天使は、悔しそうな顔で、逃げるように消えていきました。しばらくすると黒い雲は消え、元の晴れた天気に戻りました。マロンくんは鏡をおろすと、光はうっすらと消えてなくなりました。

「くまの方よ、どうもありがとうございました。これで雲へ帰れます。」

本物の雲の天使は微笑みました。マロンくんは帽子を天使に差し出しました。すると雲の天使は言いました。

「わたしは墮天使です。もうこの帽子を使うこと

はできません。

どうぞ私を雲へ連れていってもらえませんか。」

そのとき空からあの上天使がやってきました。

「我が子、天使よ。帽子をなくしたことはこの上ない罪。二度と戻れることがなかったそなたに、くまの子は、光を導いた。さあ、わが子よ。戻るときがきたのだ。」

上天使は、マロンくんの持つ帽子に手をかざしました。すると、帽子は光り、そして力がみなぎりしました。マロンくんは、帽子を雲の天使の頭の上ののせました。

6.

天使たちはマロンくんを家までつれてきてくれました。

「さようなら、天使さん」

「さようなら、くまの子」

「またいつか会いましょう。」

天使はマロンくんとお別れをし、天へ飛び立ちました。夕焼け色に染まった空と雲の中を、ふたつの星が流れていきました。\*\*おわり\*\*

この話は蔓庵発行メルマガ“かずら日和”で連載されました。許可なしの転写、編集、文章借用等はお断り願います。